

大樹寺からの歴史的眺望（ビスタライン）

岡崎らしい 風景の象徴 岡崎城への眺望

岡崎らしい風景の象徴である岡崎城を眺望する視点場としては、殿橋が最もよく知られるとともに親しまれており、また、大樹寺から岡崎城を望む歴史的眺望は、「ビスタライン」と呼ばれ、その歴史的背景から最も大切にすべき眺望とされています。一方で、浮世絵にも描かれた矢作橋からの眺望は、現在は見えにくくなっており、大切にすべきとの声もやや少なくなっています。



「ビスタ」は「眺望・展望」を意味し、大樹寺と岡崎城を結ぶ約3kmの直線を「ビスタライン」と呼んでいます。これは徳川三代将軍家光が、寛永18年（1641年）、家康の十七回忌を機に、徳川家の祖先である松平家の菩提寺である大樹寺の伽藍の大造営を行う際に、「祖父生誕の地を望めるように」との想いを守るため、本堂から三門、総門（現在は大樹寺小学校南門）を通して、その真中に岡崎城が望めるように伽藍を配置したことに由来しています。時は移り、岡崎城も復元されましたが、大樹寺から岡崎城を望む歴史的眺望は往時のままで、門越しに望む岡崎城は、まるで額の中の絵のようです。



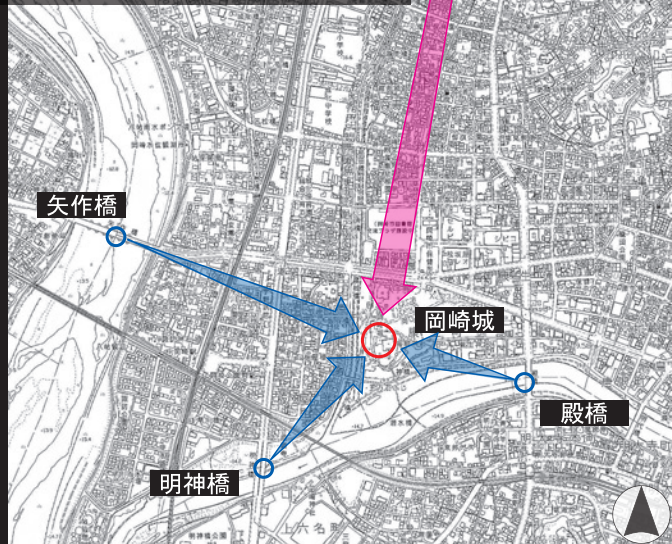
岡崎城

家康生誕の岡崎城は、五万石ではありましたが、諸大名や東海道を旅する旅人から「神君出生の城」として神聖視され、仰ぎ見られた存在であり、歴史上重要な拠点として永く市民に親しまれ現在に至っています。

また、歴史的な意味を持つ拠点として、周辺を取り巻く都市景観の中で重要な要素となっています。



歌川広重「岡崎 矢作ノ橋」
（「東海道五十三次」保永堂版）



三橋からの眺望



矢作橋



明神橋



殿橋

視点場への市民意識

※平成20年岡崎市景観に関する市民意識調査（回答数1094名）

